

重症度、医療・看護必要度の基準に診療側「20%台前半」

1月29日の中医協・総会（会長：田辺国昭・東京大学大学院法学政治学研究科教授）では、27日に引き続き、2016年度診療報酬改定の個別改定項目（短冊）について議論を行った。



7対1入院基本料等については、急性期医療における機能分化を進めるための見直しが提案されている。具体的には、①一般病棟用の重症度、医療・看護必要度の評価項目の見直しと該当患者割合の基準引き上げ、②10対1病棟移行時の病棟群単位の届出制導入、③在宅復帰率（自宅等退院患者割合）の基準引き上げ——などにより、過剰といわれる7対1病床の絞り込みを図る。

①では認知症や手術などに関する評価項目が追加されることとなっているが、基準の引き上げについては支払側委員と診療側委員で見解が割れている。この日、診療側の中川俊男委員（日本医師会副会長）は具体的な基準として「20%台前半に設定すべき」と提案した。さらに「一律に決めるのではなく、病床規模や内科・外科といった条件の違いを考慮する必要がある」との問題意識も表明している。

一方、支払側の幸野庄司委員（健康保険組合連合会理事）は、今回の短冊でM項目に「全身麻酔・脊椎麻酔の手術」や「救命等に係る内科的治療」が入ってきたことを受け、「これまで25%を要望してきたが、M項目が増え該当する患者が拡大することから、25%より高く設定すべきである」とした。

②は、7対1病棟から10対1病棟に移行する場合に限り、一時的に7対1病棟と10対1病棟を同時に持つことができるようにするもの。現行では、1医療機関に複数の一般病棟がある場合、全ての病棟を同一の入院基本料で届け出る必要がある。

これについて、診療側は病棟群単位の届出を恒久化するよう求めているが、支払側は事務局の提案通りあくまで経過措置として扱うべきとの姿勢を見せている。中川委員が「今後も引き続き中医協での議論のテーマとなる」としたほか、万代恭嗣委員（日本病院会常任理事）は「経過措置としての縛りが厳しすぎると、かえって7対1の固持につながるのではないかと懸念を示した。

③では、基準の引き上げとともに、在宅復帰率のカウント対象になる「自宅等」に在宅復帰機能を有する有床診療所を加える。これまでの議論では「自宅への復帰」と同様に扱われる「回復期リハビリテーション病棟や地域包括ケア病棟への転棟等」をカウント対象から外す方向性も示されていたが、むしろ対象を増やすという今回の提案に対し、幸野委員は「どの医療機関でも高い在宅復帰率になる」と、要件として機能不全に陥るとの疑義を表明した。事務局は「前回改定で導入されたものであり、大幅な見直しは混乱につながる」と説明している。

なお、支払側委員が求めてきた平均在院日数の短縮は「短冊」には盛り込まれなかったが、幸野委員は改めてその必要性を訴えた。

### ■ 答申書附帯意見案を提示

2016 年度改定後の影響を調査する答申書附帯意見の項目案には、「一般病棟入院基本料等の重症度、医療・看護必要度の見直し」や「かかりつけ医、かかりつけ薬剤師の評価等」「残薬、重複・多剤投薬の実態」などが盛り込まれた。委員からは、「7 対 1 入院基本料の見直しによる平均在院日数への影響」「地域包括ケア病棟入院料の見直し」「救急医療管理加算に係る患者像の実態」などの項目追加が要望されており、引き続き議論を深めていく。

### ■ “突然”の選定療養の見直し案に困惑

会合では、『日本再興戦略』改訂 2014』に基づく関係学会・団体や国民の意見募集の結果を踏まえた、選定療養の考え方の整理・項目追加案も議題となった。

現行では、保険診療と併用できる保険外診療として、選定療養には特別の療養環境（差額ベッド）や予約診療、紹介状なしの大病院受診、制限回数を超える医療行為など「保険導入を前提としないもの」が規定されている。これに対し事務局は、「医療を取り巻く状況の変化や技術の進展等に伴って保険導入の可能性が生じることがあり得る」と、保険導入の可能性を初めて明示した。なお、同じ枠組みで将来の保険導入を想定するものとして評価療養が設定されている。

また、新たに「治療中の疾病又は負傷とは直接関係しない検査」を選定療養に追加する案も提示。治療の実施上は必要がないノロウイルス検査等を想定しているとした。その他、特別の療養環境として「差額診察室」を認めることなども提案している。

これらについて事務局は、2016 年度改定の答申に合わせて告示改正等を行う方向性を示したが、委員からは『保険導入の可能性の明記』は混合診療の拡大につながる」などの反対意見が出たほか、「そもそも意見募集の結果報告と捉えており、何かを決めるための準備はしていなかった」と提案が“寝耳に水”であることを訴える声が多数聞かれたため、改めて議論の場を設けることとなった。